

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人 **小羊学園**

〒431-1304

静岡県浜松市細江町中川7440-1

電話：053-437-0826 FAX:053-437-0849

E-mail kohituji@imix.or.jp

H.P http://www.imix.or.jp/kohituji/

発行人：稲松義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30 円

2006年4月20日

第 282 号

不惑

理事長 稲松義人

創立四〇周年を迎える今年、小羊学園にとって大きな転換点となりそうである。今年度から段階的に施行される障害者自立支援法は、小羊学園の歴史そのものを問うような大きな制度改革だからである。

小羊学園は、当時の学校や福祉施設では対応できなかった重い知的ハンディのある子どもたちを受け入れる入所施設として開園した。入園してきた子どもたちは、それぞれ家族やそれまで住んでいた地域社会から離れて、小羊学園に入園してきたのである。七年後、成長しても家庭や地域社会に戻ることのできない人たちのために、県重症児守る会の人たちと一緒に、おぞらの家(今のおおぞら療育センター)を開設した。またその五年後、成人施設、若樹学園(今の支援センターわかぎ)を開設した。いずれも重い知的ハンディのある人たちの入所施設であった。若樹学園を開園した翌年(一九七九年)が、養護学校義務化の年であった。たとえ重い知的ハンディがあっても義務教育を受ける権利を認めるべきだという時代の流れによる、大きな転換点であった。地元の小中学校に通う道が

閉ざされることを案じて反対する人たちも少なくなかったが、今まで学校にいくことが認められなかった子どもたちにも通う場所ができ、このことによって小羊学園のような児童施設へ入所する人たちは減少していった。しかし反対に、成人の入所施設はこの時期に急増していくことになった。

今になって振り返ってみるとこの時期に、小羊学園は新しい入所施設を開設していない。一九八五年に、小羊学園の中の成人した人たちのために半分を改築し、小羊学園青年寮を開設しているが、この時期は主に、日中活動の場を施設の外に求めたり、養護学校への通学を始めたり、施設の建物からでて暮らすことを相談したりして年月を過ごしている。

一九八七年に社会福祉法人の認可を得て、この時期に開設したのは、養護学校を卒業した人たちのための小羊学園初めての通所事業、小羊デイケアホーム(一九八八年)であった。おぞらの家では一九九一年に小児神経科の専門医、横地健治氏が所長に就任し、小児リハビリ外来が始められた。重症児者の短期入所事業、通園事業など、次々に地域のニードに応える事業展開が施設整備を含めて進められた。二〇〇二年に北棟が増築され、その勢いで、昨年秋に静岡市内に開設されたつばき静岡は、若樹学園以来の新設の入所施設となった。

しかし、今回の法改正は、知的障害とか重症心身障害という枠組みではなく、介護が必要な人たち、訓練が必要な人たち、就労すべき人たちという分け方で施設を再編成するように方向づけている。小羊学園は、重いハンディをもっている人たちのための支援をしてきたので、介護給付による事業が中心になるだろうと考えているが、私たちはこれまで、組織としての事業継続、事業発展のために歴史を重ねてきたのではない。幼いときから重い知的ハンディをもち、限られたコミュニケーションの中で生活し、人と人の関わりの中に人生をゆだねて生きるしかない人たちの出会いの中で、自分たちのなすべきことを探し続けてきた。

しかし、今回の大きな転換点に立って、これまで自分たちの歩みを再確認しなければならぬと感じている。素早く新しく示された枠組みに合わせ、目に見える多くのニードに効率よく応えていくことが、これからの小羊学園が進むべき道なのだろうか。

小羊学園は、これまでと同じように重い知的ハンディのある子どもたちの人生に寄り添って、彼らのいのちの豊かさや出会い、多くの人たちにそれを伝え、皆で分かち合っていくことを願いつつ歩み続けたいと、私は思う。

「四十にして惑わず」というのは論語の一節であっただろうか。今、「不惑」の二文字を噛みしめている。

創立四〇周年

それぞれの現場から今、思うこと

小羊学園は今年で創立四〇周年を迎えます。学園とともに時代を廻ってきた周りの木々も、大地にどっしりと根を下ろし、しっかりと幹を据え、空に向かって枝をいっぱいに広げています。

小羊学園は、昭和四一年五月、山浦俊治・明子ご夫妻の祈りのうち、多くの方々にご支援を頂いて、定員三〇名の知的に重い障がいをもった子どもの施設として誕生しました。

私を含め一三名の職員のほとんどが経験の乏しい者でしたし、経済的にも不安を抱えた中でのスタートに、今は亡き山浦園長は、喜びや期待と同時に不安で一杯だったと思います。でも、そんな素振りを、私たち職員には一度も見せませんでした。ただ、小羊学園の名称とされた聖書の箇所である、一匹の小羊の話は何度も繰り返しお話しされました。私たちは、何に縛られることなく、のびのびと仕事をさせていたできました。仕事に対する姿勢、精神はその頃の一つひとつが土台になっていると思います。

数年前からは、入所の方だけでなく、在宅の方々への支援も大きなウエートを占めるようになってきています。制度の中で保障されない困難な対

象者に対して、今の職員も、支援を必要とする一人ひとりのことを覚え、一杯力を注いでくれています。

制度が大きく変わり、先の不安要素は沢山ありますが、一人ひとりがその人らしく輝いて生活できるように、創立の精神を忘れずにお手伝いができたら幸いと思います。

それぞれの現場から、職員としての思いを書いてもらいました。

(小羊学園 施設長 渡辺禎子)



親御さんの気持ちを受けとめたい

小羊学園 児童寮 坪井智代

今年の春も、小羊学園のグラウンドで満開の桜が姿を見せてくれました。桜がこんなにも私の目に鮮やかに飛び込んでくるのも、児童寮で日々たくましく成長してくれる子どもたちと一緒に、生活できるからこそだと感謝しています。

児童寮は入所施設ですから、ご家庭から子どもたちをお預かりして支援しています。そのためここでは、職員がお母さんやお父さんの代役を務めることとなります。職員は、子どもたちへの支援を通して、少しでも親御さんの代役になればと思っただけ奮闘するわけですが、そうした関わりの中で、親御さんのご苦労を少しだけ感じられるような気がしています。

児童期の支援では、学校、家庭、施設の間で連携が大切です。特に、生活を支援する私たち職員が、親御さんの気持ちをしつかりと受けとめることは、欠かせないことだと思っています。

そしてその役割は、在宅で子育てをされているお母さんやお父さんに対しても同様です。児童寮で提供できる具体的なサービスとしては、レスパイトを目的としたショートステイくらいですが、私たちの受けられる限度を大き

く超えてご希望があり、毎月利用調整をさせていただいているのが現状です。在宅の子どもたちにとっても、親御さんとともに成長を支えていく役割は必要だと感じます。しかし、この課題を私たちが抱え込むのではなく、親御さんたち、行政の人たち、地域の皆様と共に、打開策を考えていくことが大切だと思っています。

豊かな日中活動の場をめざして

小羊デイケアホーム 出水巖生

一昨年末まで生活訓練ホームだった小羊デイケアホームが、知的障害者デイサービスセンターになって一年が経過しました。

一年間が過ぎて思うことは、利用者の皆さんが本当に多くの変化を見せたということ。当初は多少の戸惑いもありましたが、毎日通って来る生活に大きな意味があった人、小さなことでも繰り返し返すことで理解し、自分の力をつけることができた人、多くの人と関わりを楽しんだ人、得意な活動の分野で自分を生かせる人など、職員として同じ場所に通ってくる他の利用者と一緒に、その人なりに一生懸命取り組んできたことが、自信となり充実感となっているようです。

結果として様々な力を身につけた



けではなく、その中に多くの笑顔や様々な表出が見られるようになったことは、支援する者として嬉しいことでした。特にデイケアホームでだけではなく、保護者の方から、家庭においても落ち着いたとか、笑顔が見られるようになってきたと言ったのが、何よりの励みになりました。

今度の新制度においては、事業体系として日中活動の場と住まいの場を分けることも目的の一つとなっていて、小羊学園では以前から日中活動の場の提供を大切に考えてきました。どんなに重い障がいを持っているとしても、その人の生活の中で日中活動の場

があり、人との関わりを通してアクティヴな活動拠点として、また様々な役割や楽しさを実感できる場として、その方が充実感を得られるような支援に努めたいと思います。

地域での生活支援を通して

温心寮・あゆみホーム 皆川明子

小羊学園には入所施設から出た暮らしの場が二カ所あります。温心寮（グループホーム）と、あゆみホーム（自活訓練棟）です。

新しい制度の中では二カ所とも「ケアホーム」への移行が予測されます。新しい制度の中で、どのような支援体制が可能になってくるのか、利用者の生活にどのような影響があるのか、これまでの経験を踏まえてこれから検討していかなければなりません。

重い障がいのある利用者で構成されているあゆみホームは、立ち上げからようやく一年が過ぎたところです。週末の過ごし方や支援体制、共通支援の見直し、この人たちが地域で生活することの意味や、それぞれの状態に合わせて一人ひとりに相応しい支援を提供するためには、検討していかなければならないことは尽きません。

温心寮は四年目になります。地域交流の場に参加し楽しむことができ、希

望や要求を口頭で伝えることのできる人たちが中心です。それでもケアホーム対象者が中心であると思われ、グループホーム対象の利用者を含むケアホームになると予測しています。ケアホームになるとヘルパーの利用がでなくなることは残念ですが、近くの大学の学生たちとの交流も少しずつ増えてきたため、より積極的に地域の支援者を発掘していけるよう連絡を取り合っていきたいです。一人ひとりの利用者の「○○したい」という希望を大切に、「新制度になったら希望が通らなくなつた」と言われぬよう、職員間でも知恵を出し合い最善の支援ができるよう努めていきたいです。

入所施設だから出来ること

小羊学園 青年寮 濱田裕子

全体としては地域生活に移行することを目指しながら、それでもこれから入所施設は必要だと感じています。

入所施設の最大の特長は、多くの支援を必要とする利用者に対して、複数の職員が交代で支援に当たるといふことだと思えます。更に、生活（ナイトケア）・日中活動（デイケア）を包括的に支援することで、利用者一人ひとりの生活全般に関わることができ、複数の職員が幅広い視野で利用者を知る



ことができます。これらの情報をもとによく協議することで、利用者にとってより相応しい支援のあり方を検討していくことができます。

しかし、毎日の積み重ねの中で、地域生活への移行を視野に入れて取り組むことが必要です。施設での生活の中で、その人にとって必要な支援を見つけ出し、ご家族や関係機関とも連携し、その人らしい地域生活への移行を進めていきたいと思えます。また、地域での生活に移った後は、バックアップ施設として、必要に応じて利用者の生活を支えることも入所施設の大きな役割であると考えます。

また、普段は家族からの支援を受けている人たちにとって、緊急の場合にはいつでも受け入れてもらえることができれば大きな安心につながります。これも地域の社会資源としての入所施設の大きな役割だと思えます。

このように入所施設は、入所する人
たちへの支援だけではなく、地域の方々
も含め、いざというときには最低限の
支援は受けられる場であることを求め
られます。また、様々な立場の職員に
より関係機関と連携がとれ、各所との
情報交換、情報発信が可能になり、地
域の相談調整機能をもつことができる
のではないかと考えます。

新人職員として



小羊学園 青年寮 中村友紀

私は、この四月から青年寮の職員と
して働かせていただいています。利用
者の方々の純粋で素直な心に惹かれ、
この職業に就きましたが、私自身まだ
まだ未熟で、職員の皆さんや利用者
の方々に助けられて、何とか過ごしてい
ます。

学生の頃、実習でお世話になってい
たときから、小羊学園にどこか温かい
ものを感じていたのですが、職員とし
ての毎日働く中で、ある時ふと、それ
は、寮内に利用者の方々や職員の明る
い声が聞こえてくるからだと思いきま
した。支援員室の前には椅子が並べら
れており、ここで利用者の方々がゆっ
たりと過ごしている姿をよく見かけま
す。この支援員室の向かいが玄關となっ
ているため、利用者の中には大好きな

職員が出動してくるのを待っている方
もいます。また、私自身も出勤の際に、
利用者がこの椅子にゆったりと座って
いるのを見ると、とても温かい気持ち
になります。

私はこの椅子のように、温かみがあ
り、そっと側にいるだけで安心できる
ような職員でありたいと思います。そ
して、これまで多くの職員のいろいろ
なアイデアや温かい気持ちによって、
今の小羊学園がつくられてきたことを
感じながら、私も私なりにこれから力
を尽くしていきたいと思えます。

小羊学園の将来を見据えて



支援部長 雨宮 寛

「これからどんな仕事をしたいのか」
というテーマを頂き、現状を見ながら
これからの小羊学園について、いろい
ろと想いをめぐらせてみるのですが、
具体的に思い浮かんでくることは、現
場の職員が書いてくれていることと同
じようなことです。

この四月に施行された障害者自立支
援法への対応に振り回されつつ、この
ままでよいのだろうか、不安になり
ます。「皆が幸福にあるように」とい
う社会福祉が本来めざすべきことが、
疎かになっていくような気がしていま
す。小羊学園では、私たちが関わる人



たち、施設を利用する人たちが幸福で
あるようにとの願いを、今までも、こ
れからも、自分たちの行う仕事の原点
としたいと考えています。「これから
こんな仕事をしたい」と夢を語るには、
あまりにも厳しい現実が目の前にはあ
ります。しかし、だからこそ先にある
ものをしっかり見据えていかなければ
いけないのかもしれない。

昨年、小羊学園は移転改築の計画を
静岡県と浜松市へ提出しました。残念
ながら国の補助金を申請する対象には
してもらえませんでした。こんな
仕事が見たい」という想いを詰め込ん
だ計画（マスタープラン）が出来上が
りました。六つのゾーンに一二の生活
ユニット。一ユニットに六名での生活
を考えました。各ユニットには、ダイ
ニングキッチン・浴室・トイレ・居室

（全室個室）があり、ユニット間の連
携も考慮した配置にしました。中央に
は共用スペースとして、管理サービ
ス、地域交流スペースがあります。周
囲の住宅と並んでも違和感のない外観、
近隣の方たちとも自然に関わりがもて
る空間をイメージしました。

また、将来的にグループホームやケ
アホーム等の地域生活への移行が、ス
ムーズに行えるような生活スタイルと
支援体制が取れることも、計画のコン
セプトの大事な要素となっています。

小羊学園のあゆみの中で培ってきた
利用者に対する様々な想いや暮らし方
の夢が、今回の移転改築計画であると
思っています。厳しい中であっても夢
の実現を目指してがんばっていきたく
と思います。そして、その輪の中に多
くの人たちが、さらに加わってくださ
ることを望んでいます。

編集後記

小羊学園のあゆみを振り返って
思うことは、「感謝」という一言
に尽きるように思います。様々な
かたちでご支援くださり、ご協力
くださり、ご助言くださるお一人
おひとりにあらためて心からお礼
申しあげます。